

助数詞の獲得における知覚的次元の役割

内田 伸子 今井 むつみ
(お茶の水女子大学) (慶應義塾大学)

【問題】ラベルの獲得がカテゴリー理解にどのような影響を及ぼすかを検討するのに助数詞は格好の素材を提供する。内田・今井(1992,1994)は、生物については幼児期後半までに助数詞が分化すること、また、助数詞付与ルールは自発的に生成し、環境からの入力によって修正・洗練させることを明らかにした。本研究では第1に事物カテゴリーにおいても生物カテゴリーと同様に分化していくか、第2に助数詞付与ルールを生成するときの手がかりとして事物の形状がどのような役割を果たすかについて検討することを目的とする。【仮説】①事物の知覚的次元が助数詞付与の手がかりになる。②身近で数える経験がある事物ほど助数詞の獲得は早い。③助数詞付与ルールの自覚的使用は生物カテゴリーの場合と同様に5歳後半から可能になる。

【方法】実験計画; 4年齢(4歳前半~5歳後半)×2条件(既知・未知)の2要因計画,各要因独立。被験者; 4歳前半(m:4:1,r:3:10~4:5)・4歳後半(m:4:8,r:4:6~4:11)5歳前半(m:5:4,r:5:0~5:5)5歳後半(m:6:1,r:5:7~6:7)各20名(男女半々)計80名。手続き; [材料]表1に示す。

【課題】(0)TOPT課題→練習(犬・人)→(1)産出課題(既知・未知)→(2)選択課題(既知・未知物)→(3)選択の理由づけの順に課した。

【結果】(0)TOPT課題: 4歳前半~5歳前半(3.3~3.5)〈5歳後半(4.2)であった。以下の結果は表2。

(1)産出課題(表2左欄);性差はなかったので,年齢×条件(既知・未知)で,MANOVAを行った結果,年齢の主効果(F(3,76)=5.87,p<.001),条件の主効果(F(1,76)=12.77,p<.001)が有意であり交互作用は有意ではなかった。年齢については一要因分析を行い,下位検定を行った結果,5歳後半≒4歳後半)4歳前半の間が5%水準で有意であった。

(2)選択課題(表2中欄);同様の分析を行った結果年齢の主効果(F(3,76)=20.92,p<.0)は有意だったが,条件の主効果(F(1,76)=2.81,P<.09)は傾向のみ,交互作用は有意ではない。下位検定の結果,5歳後半~4歳後半)4歳前半の間のみ5%水準で有意であった。選択は自発的に付与するよりも易しいことを示している。

(3)理由づけ(表2右欄);同様の分析を行った結果,年齢(F(3,76)=18.92,p<.00)の主効果のみ有意だった。下位検定の結果,5歳後半)5歳前半)4歳後半≒4歳前半の間が1%水準で有意であり,加齢と共に理由が説明は適切になるが,プロトコルからは5歳後半児で明確に進歩することが窺われる。

以上の結果から,既知・未知にかかわらず,子どもは物事の形状を手がかりにして助数詞を使い分け(仮説①),既知物は未知物より助数詞を付与し易く(仮説②),加齢に伴い助数詞が使えるようになること,5歳後半過ぎには一貫した説明をすることから意識化が可能になる(仮説③)ことが示唆された。

表1. 実験材料

	産出課題		選択課題	
	既知物	未知物	既知物対	未知物対
個	消しゴム	粘土製三角錐	サイコロ・コースター	カククス半円・ピン棒
本	鉛筆	カククス製I字	スプーン・小カップ	白団子棒・ゴム四角
枚	皿	粘土製円盤	折り紙・サイコロ	四分円・赤ネリ棒
粒	米粒	おがくず	実・皿	ビーズ・黄色小片
杯	カップにビーズ	おがくず	スプーンに米・コースター	粘土型に砂・黄箱

注) 課題順: 既知物→未知物, 各項目の提示順はランダム, 対の左右配置はランダム

表2. 各課題の平均得点(分散)

	産出課題 [10点]		選択課題 [5点]		理由づけ [15点]	
	既知	未知	既知	未知	既知	未知
4歳前半	1.2(2.0)	0.6(1.5)	2.7(1.3)	2.4(0.9)	2.3(2.6)	2.2(3.0)
4歳後半	3.2(2.5)	2.1(2.2)	3.6(1.3)	3.2(1.3)	2.9(2.9)	2.6(3.1)
5歳前半	3.7(3.4)	3.1(2.9)	4.1(4.0)	4.0(0.5)	6.0(4.1)	6.6(3.9)
5歳後半	4.4(3.6)	3.8(2.5)	4.5(0.6)	4.3(0.9)	9.2(3.4)	8.3(4.2)